

平成26年度 病害虫発生予報 第10号

平成27年1月23日
栃木県農業環境指導センター

○トマト葉かび病の増加に注意しましょう！

予想期間 1月下旬～2月下旬

予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 いちご 灰色かび病

- (1) 発生予想 発生量：**平年並**
- (2) 根拠 ・現在の発生は平年並（平年比：ほ場率136%）。(±)
・向こう1か月の気温は高く、日照時間は平年並または少ない。(±)
- (3) 対策 ・下葉を除去し、風通しをよくするとともに、かん水は必要最小限にとどめる。
・発病した果実、果梗等は伝染源となるので、速やかに取り除き、施設外で処分する。
・防除は予防を主体にセイビアーフロアブル20、ダイマジン等を葉裏にも良くかかるように散布する。
- (4) 備考 ・微生物防除資材（ボトキラー水和剤等）は発病前～発病初期に利用する。また、低温条件では効果が出にくいので、10℃以上が確保できる施設内で使用する。
・「[野菜類灰色かび病の薬剤感受性検定結果①、②](#)」を当センターHPに掲載中。

2 いちご うどんこ病

- (1) 発生予想 発生量：**平年並**
- (2) 根拠 ・現在の発生はやや少ない（平年比：ほ場率46%）。(-)
・向こう1か月の日照時間は平年並または少なく、発生にやや適している。(＋)
- (3) 対策 ・適正な温度管理、換気やかん水等を実施する。
・発生を予防するため、硫黄粒剤でくん煙する。
・発生が見られる場合は、パンチョTF顆粒水和剤やベルコートフロアブル等を散布する。
- (4) 備考 ・硫黄くん煙は天敵に対し悪影響があるため、長時間の使用は避ける。

3 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：**やや多い**
- (2) 根拠 ・現在の発生は平年並（平年比：ほ場率122%、発生株率130%）。(±)
・主要薬剤の殺虫効果が低下しており、密度抑制が困難である。(＋)
- (3) 対策 ・ほ場をこまめに観察し、増殖する前に防除する。
・必要に応じて葉かきを行い、薬剤がかかりやすい状態で気門封鎖剤等を散布する。
- (4) 備考 ・気門封鎖剤は、複数回、十分量を散布する。
・天敵製剤を使用する場合は、放飼前に一度防除し、ハダニ類の密度を下げる。また、使用する薬剤は天敵に影響のないものを選択する。
・天敵放飼から1～2週間は薬剤散布を避ける。
・「[園芸作物に発生したナミハダニの薬剤感受性検定結果](#)」を当センターHPに掲載中。

4 いちご アザミウマ類

- (1) 発生予想 発生量：**平年並**
- (2) 根拠 ・現在の発生はやや少ない（平年比：ほ場率18%）。(-)
・前年秋期のアザミウマ類の発生は平年並～やや多い。(＋)
- (3) 対策 ・発生が見られたら、低密度のうちにカウンター乳剤やマッチ乳剤[ミカキアザミマ]等のIGR剤で増殖を防止する。
・花を観察して、その1割以上でアザミウマ類が見られた時は、被害が大きくなる恐れがあるため、スピノエース顆粒水和剤かディアナSCを散布する。
- (4) 備考 ・秋期にアザミウマ類の発生が多かった施設では、春先の早い時期からアザミウマ類が発生しやすいので、注意が必要である。
・スピノエース顆粒水和剤やディアナSCは、天敵やミツバチへの影響があるので、使用にあたっては注意が必要である。
・[植物防疫ニュースNo. 16（いちご：アザミウマ類）](#)、「[園芸作物と花きに発生したアザミウマ類の薬剤感受性検定結果（続報）](#)」を当センターHPに掲載中。

5 トマト 灰色かび病

- (1) 発生予想 発生量：平年並
- (2) 根 拠 ・現在の発生は平年並（平年比：ほ場率140%、発生株率40%）。(±)
・向こう1か月の気温は高く、日照時間は平年並または少ない。(±)
- (3) 対 策 ・施設内が多湿にならないように換気やかん水に注意する。また、循環扇や暖房機等を稼働し、植物体表面の結露を除去する。
・咲き終わった花卉や発病果、発病葉は伝染源となるので速やかに取り除き、施設外で処分する。
・防除は予防を主体にフルピカフロアブル、カンタスドライフロアブル等を葉裏にも良くかかるように散布する。
- (4) 備 考 ・微生物防除資材（ボトキラー水和剤等）は発病前～発病初期に利用する。また、低温条件では効果が出にくいので、10℃以上が確保できる施設内で使用する。
・[植物防疫ニュースNo. 19\(トマト：灰色かび病\)](#)、[「野菜類灰色かび病の薬剤感受性検定結果①、②」](#)を当センターHPに掲載中。

6 トマト 葉かび病

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根 拠 ・現在の発生は多い（平年比：ほ場率338%、発生株率469%）。(+)
・向こう1か月の気温は高く、日照時間は平年並または少ない。(±)
- (3) 対 策 ・施設内が多湿にならないように換気やかん水に注意する。
・肥切れ等により生育が衰えると発生しやすいので、肥培管理に注意する。
・発病葉は伝染源となるため、発生初期に速やかに取り除き施設外で処分する。
・発生が見られたら、アフェットフロアブルやサプロール乳剤等を散布する。
- (4) 備 考 ・抵抗性品種でも発病するレースがあるため、発生に注意する。
・[植物防疫ニュースNo. 17\(トマト：葉かび病\)](#)を当センターHPに掲載中。

7 きく ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は平年並（平年比：ほ場率97%）。(±)
・主要薬剤の殺虫効果が低下しており、密度抑制が困難である。(+)
- (3) 対 策 ・薬剤のかかり易い生育初期から防除を行う。
・葉裏をよく観察し、発生が見られたら、下葉や葉裏にもよくかかるように丁寧に薬剤を散布する。
- (4) 備 考 ・[「園芸作物に発生したナミハダニの薬剤感受性検定結果」](#)を当センターHPに掲載中。

8 その他の病害虫

		現 況	発生予想			現 況	発生予想
いちご	アブラムシ類	多	多	きゅうり	うどんこ病	平年並	平年並
	ユナジラムシ類	平年並	やや多			べと病	多
トマト	すすかび病	多	多	きく	白さび病	少	少

1か月気象予報（予報期間1月17日から2月16日 1月15日気象庁発表）

平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。向こう1か月の日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。週別の気温は、1週目は、平年並または高い確率ともに40%です。2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

	低い（少ない）確率	平年並の確率	高い（多い）確率
○気温	30%	30%	40%
○降水量	30%	40%	30%
○日照時間	40%	40%	20%

○農薬の使用方法が変わります

農薬の残留基準値を設定する際に新たな評価項目（短期暴露評価）が導入されたことに伴い、今後使用できなくなる農薬及び使用方法が変更される農薬があります。

農薬をラベルに記載された使用方法で使用した場合でも、今後改めて設定される農作物の残留基準値を超過する恐れがあるので、注意が必要です。

詳しくは農業環境指導センター(Tel 028-626-3086)までお問い合わせください。
病害虫情報発表のお知らせはツイッター「[栃木県農政部\(@tochigi_nousei\)](#)」、農業環境指導センターホームページ (<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/index.html>)でもご覧になれます。